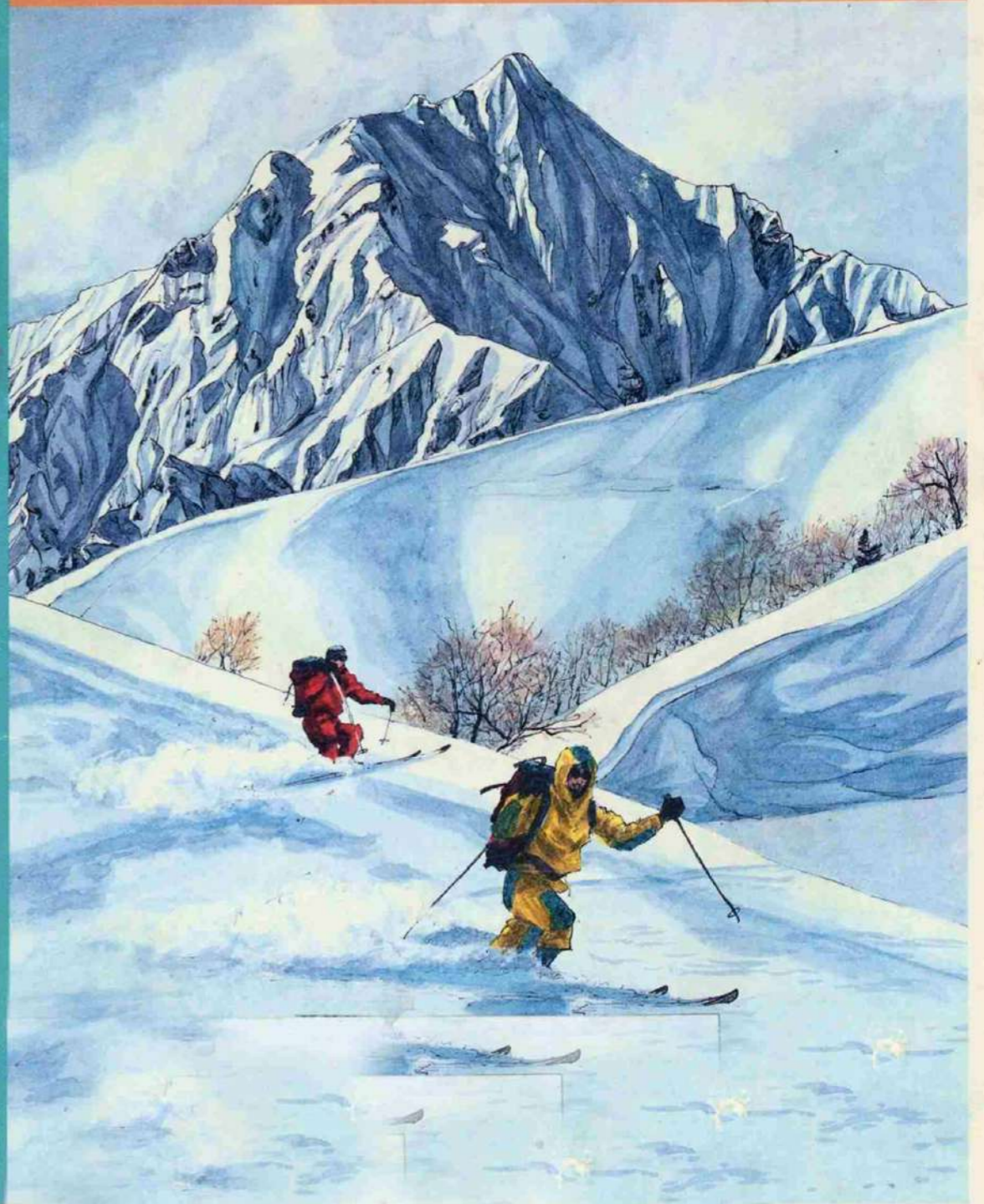


山人

特集/いま山スキーがオモシロイ!!

カラー=夢のオートルートを滑る,最新山スキー用具,これがテレマーク用品だ
ガイド=会津駒・燧ヶ岳,巻機山,武尊山,尾瀬~平ヶ岳,御岳,黒部源流大滑降



登山の情報誌

BAKUJIN/488

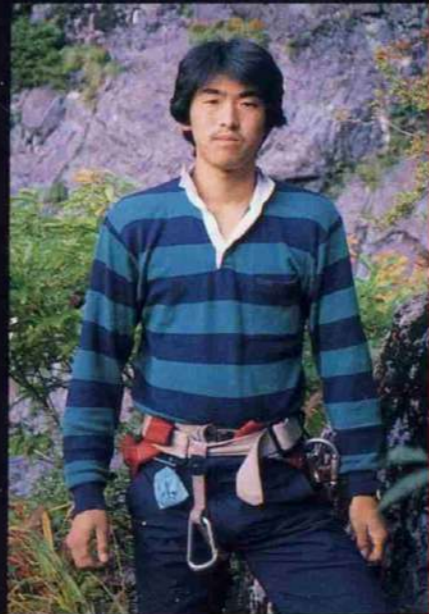
2

志水哲也さんと
幻の剣沢大滝

幻の剣沢大滝のベールをはいだ

志水哲也さん

タキ火テラスに立つ志水哲也さん



F1(48m)すさまじい奔流が落下する



二年まえ、夏山シーズンを前にして、魚津岳友会の佐伯邦夫さんのお宅に見知らぬ男から電話があった。「宇奈月の宿を世話してください」。この唐突な頼みに佐伯さんは憤然とした。この男が志水哲也だ。昭和40年12月生まれ、横浜市在住、JEC C C会員。彼は半年かけて50万円ため、その金で半年山に入る。「はじめは非常識だと思いました」と前置きして、佐伯さんは「彼の黒部探査は冠松次郎以来の成果です。その集中力はヒマラヤ八千m峰登頂以上です」と高く評価する。自立心のない若者が多い現在、単身、積極的に自然と立ち向かうそのライフスタイルが注目される。

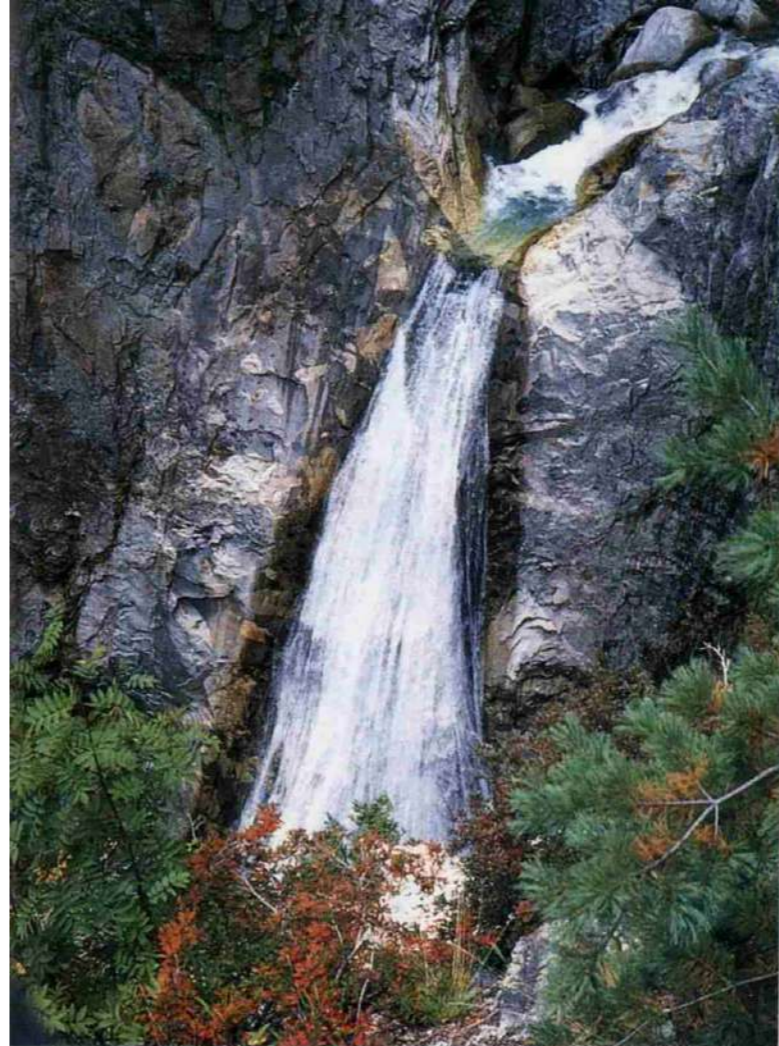
剣沢は剣岳南面を水源とし、棒小屋沢と合流して十字峽を形作る、黒部川の一大支流である。上流部に大雪渓があるため、その膨大な残雪が多量の雪解け水となる。雪解け水で黒部川の支沢では流域面積から想像できぬほどの激流をしばしば経験するが、とくに剣沢はその傾向が著しい。実際に八月中は、黒部上ノ廊下、黒部川よりもはるかに水量が多く、だいたい毎秒六トンはあろう。だ

が、九月に入ると水量が減り始め、十月になると夏には考えられないほど水量は減少する。したがって溯行適期は十月である。

剣沢を溯行する場合、対象となるのは出合（十字峽）から二俣（近藤岩）までである。それより上部は河原状でかつ登山道が脇に付けられている。出合から二俣までの間は三・五km（標高差七〇〇

m）あって、この中ほどにかつて「幻の大滝」といわれたゴルジュがある。そのゴルジュ帯の踏破が剣沢溯行の核心となる。

剣沢大滝には、大小十個前後の滝があり、滝の定義を何m以上とするかによって、その数が異なる。過去、冠松次郎氏の三段説、京都大の五段説を経て、鵬翔山岳会が九段とし、上流からA-I滝と命名している。その後、地元の高島石盛氏が何度も探査し、できる限り滝に近付いて測量を行



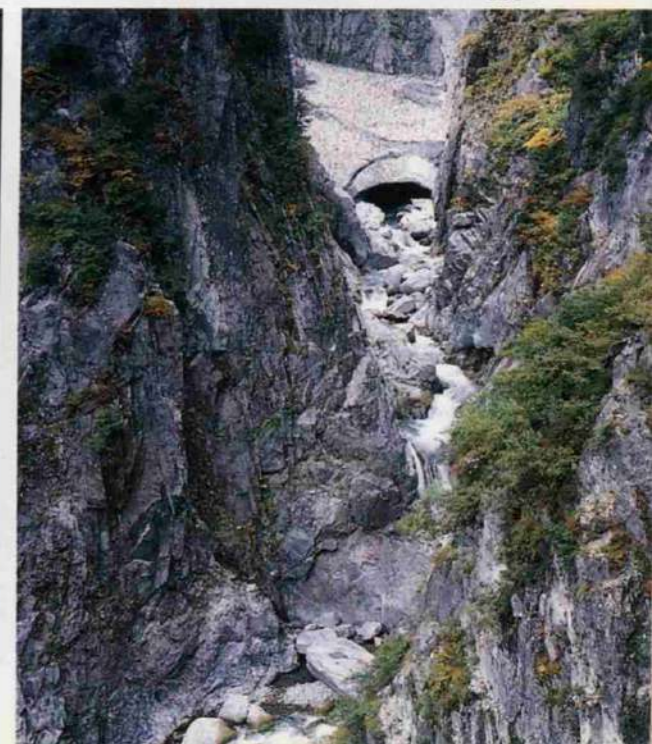
急な岩稜の3P目から望むF6

剣沢平のベース



急な岩稜からF7・F8・F9・F10を見る

高差1.2mの小さなF8



い、剣沢大滝を十二段（合計落差一三三・五m）とした。一応、私としては、これらの記録と照らし合わせながら溯行した結果、自分が確認し、かつ滝といえそうなものだけにフォルナンバーを付けて呼ぶことにした。また、滝の落差は高島石盛氏の測量した高さを用いた。

私が剣沢溯行に際してまず考えたことは、極地法の登攀であった。過去の記録、五月の偵察時の印象からいって、かなりの困難が予想された。また私は過去の記録（高島氏の完全溯行は知らなかつた）を見て、それ以上の溯行ラインを取りたかつたので、物量作戦、すなわち極地法を取らざるをえなかつた。かつて冠松次郎氏に国内随一の險谷として紹介された剣沢は、登ることができず、下ることも不可能に近いといわれた大滝に、自分の力が通じるかは疑問だったが、心に決めた以上、避けては通れない。自分の仕事は自分一人でやりとげる。あくまで単独で妥協なしの剣沢溯行を私は目指し、何とかやり遂げたのだった。

（写真と文／志水哲也）

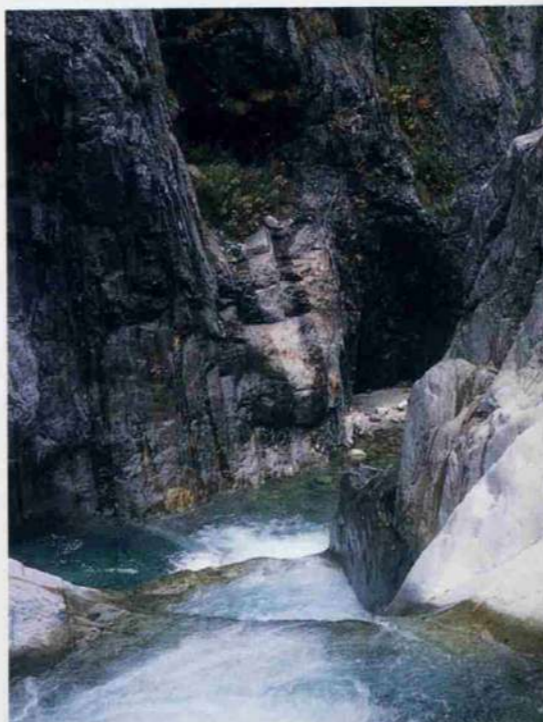


F9(7m)この付近に幻の神岩がある



剣沢大滝上部の雪渓

F10から下部を望む▶



秋の渇水期に的を絞って全流域を完全トレース 幻の剣沢大滝 単独で解明

志水哲也 ● J.E.C.C. 会員



剣沢大滝F6の全容

志水哲也、二十一歳。気がつけばもう大人といわれる年齢になってしまった。二十一年間の軌跡を考えても飛び抜けて優れたものは何もなく、一種のもどかしさを感じる。とことん普通の人間になることを嫌ってきたのに、他人が見れば普通の人間としか見えないと思うと寂しくもなる。僕が普通と少しだけちがうとすれば、山登りをしている点であろう。これだけは絶対まじめに妥協なしでやっていきたいと思っている。しかし、これも臆病でスポーツセンスや体力もない自分が、将来一流のアルピニストになれるとは思っていない。だが、一度心に決めた目標に対しては、確実にそれをする。

三回のルート工作で剣沢大滝に挑む

〔ルート工作〕(1)

一九八七年九月二十三日～二十四日
九月二十三日(晴のち曇)

いよいよ剣沢溯行を本格的に着手するこ

自分のものにしていきたい。途中で妥協したら、定職はなく、学生でもない自分に、逃げる所はなく、負け犬として町をうろつくしかない。

最近、山に登るのにパートナーを選ぶようになってきた。その山に対する目的や意気込みのちがう人と山行を共にすると、自分の山登りが壊されて、充実した山行が行えない。それだったら単独で行った方がよいと思うのである。

今回の「黒部の谷」における地域研究も妥協する余地などまったくない、自分の山登りである。剣沢大滝に登るには、人工登攀を確実にマスターしていなければならぬ。そのために谷川岳衝立岩を中心に、既成ルートの登攀を行い、丹沢の滝登りを中心にルート開拓的な登攀を重ねて技術をみがいてきた。しかし自分が剣沢大滝に登れるという確証など何もない。あるのはどんな場合でも絶対に登ることをあきらめないという自信だけである。自分が、そうありたい自分であるがために、僕は登る。自分の心の中にある剣沢大滝は今も僕のくるのを待っている。長く静かな戦いが、今始まるうとしている。

くろよんダム山荘(ロッジくろよん)を七時四十分に出発し、四時間で十字峽に着く。ここからいよいよ剣沢への踏跡に入る。標高差一五〇層ほどを登り、五〇層くらい決まっていた。山行3、報告文作成2、休養1の比率である。報告文に關しても、単独行を中心に行動したので、他人に左右されない技量、スピード、溯行感覚で記録が整理できた。

今回の地域研究では、個人の集中的地域研究ということで、ルネッサンスの特色がいくつもあった。生活の場を、自らその地域に移して行動した。これは山行を合理的に行うためだけではない。雑念の入らない純粋な気持ちで無雑な気持ちで行動したかったのである。

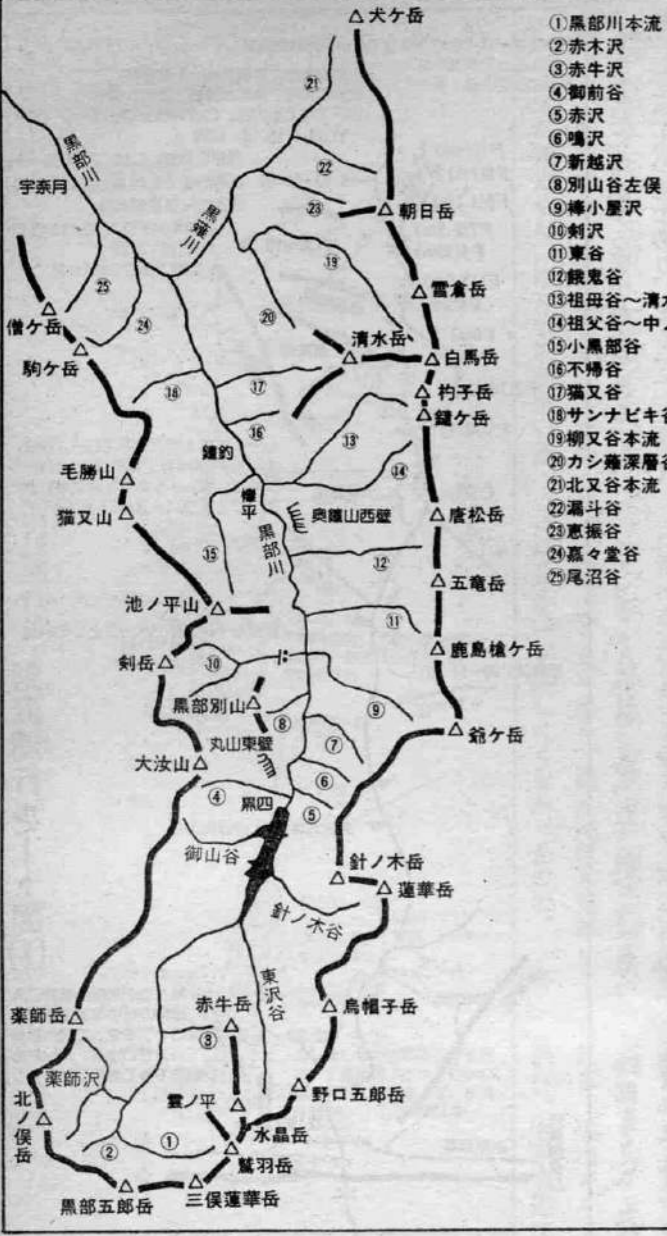
だから山小屋に下宿した時も、ひまな時にアルバイトをしようとは少しも考えなかった。

黒部川の支谷の溯行では日程の比重が

く。ここからいよいよ剣沢への踏跡に入る。標高差一五〇層ほどを登り、五〇層くらい決まっていた。山行3、報告文作成2、休養1の比率である。報告文に關しても、単独行を中心に行動したので、他人に左右されない技量、スピード、溯行感覚で記録が整理できた。

「岳人」誌で今回発表する記録は、一九八六年七月十六日から十月十五日にかけて溯行した谷と、一九八七年七月二十二日から十月三十日の間に行った二回にわたる黒部川の集中地域研究である。少々かたくなな記録であるが、先輩、諸兄姉のご意見、感想を聞かせていただければ幸せである。

黒部川流域概念図



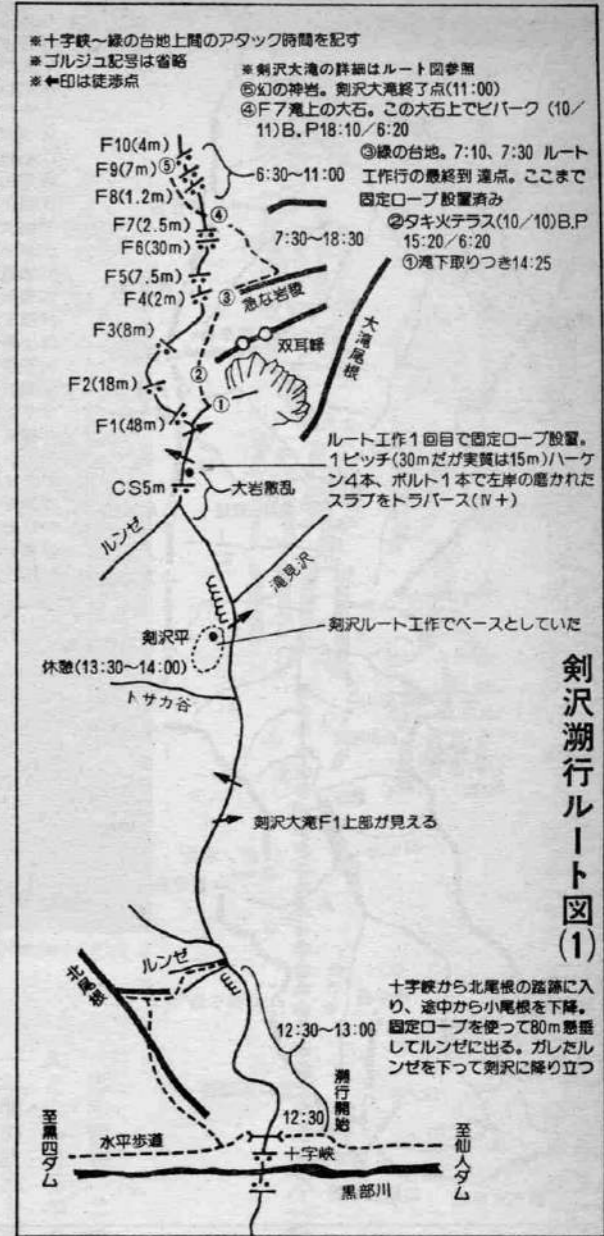
進むのにポルト一本、ハーケン五本(Ⅳ)で二時間を要した。左岸の外傾したバンドをトラバースしたが、変な体勢でポルトを打たされ時間をくった。ルート工作した所から上は水流が穏やかで徒渉も楽だ。簡単に滝下まで到達できた。もう時間も遅いので、ルート工作した所をしっかりと固定し、急いで剣沢平に引き返す。

〔タイム〕 ロッジくろよん(7:45) 十字峽(11:35) 11:45

一九八七年九月二十七日～三十日
九月二十七日(晴のち曇)
きょうから二回目のルート工作に出かけることにした。今回は、タキテラスまでのルート工作と荷上げを行う予定である。二十六、二十七日と雨が降ったので、増水を心配していたが、多少、水量が多い程度で特に問題はなかった。約五時間の徒歩で剣沢平まで行く。

〔タイム〕 ロッジくろよん(9:30) 十字峽(13:40) 剣沢平(14:40) テント泊

二十八日(曇)
六時三〇分、タキテラスへ向けて出発する。一回目のルート工作で張った固定ロープを経て、二回の徒渉でF1滝下(取付)に着く。F1(四八・〇層)は垂直のストラ



敵するくらい手強そうであった。きょうは時間も遅いので、いったん剣沢平に戻る。

〔タイム〕剣沢平(6:30) F1滝下(7:30) タキ火テラス(11:45) 剣沢平(12:50/13:45) テント泊

二十九日(晴)

六時四十分、タキ火テラスへ向かう。途中で固定ロープの取り替え作業を行ったりして時間をくい、九時三十分、タキ火テラスに着く。小休止してから緑の台地の方へルートワークに行く。

七層垂壁を懸垂下降し、そこから垂壁のトラバースに入る。一ピッチ(三〇層、懸垂した七層も含む)A1、Nで、ほとんどアプミの掛け替えて進めた。ピトン類も必要残置されており、大阪府立大パーティーが残したと思われる固定ロープも所どころに残っていた。

急に虫歯が痛み出し、一ピッチトラバースした所で引き返し、剣沢平に泊まる。

〔タイム〕剣沢平(6:40) タキ火テラス(9:30) 一ピッチルートワーク(10:00) タキ火テラス(13:00) 剣沢平(14:05/15:30) テント泊

三十日(曇のち雨)

朝ゆっくり起きて、三時間五十五分の徒歩でロジックろよんに帰る。

主な登山記録	
年、月	探査の概要(パーティー名)
1927. 8	十字峡から大滝下まで溯行(松次郎、岩永信雄、別宮貞俊)
1929. 6	近藤岩から大滝上まで下降(冠松次郎、岩永信雄、文部省撮影隊)
1931. 夏	剣沢大滝、タキ火テラスまで登攀する(日本電力測量隊)
1962. 7	大滝尾根支稜、大滝に面した大テラスから偵察、剣沢大滝のほぼすべてを目測、測量する(京都大学山岳部4人)
1962. 10	剣沢大滝を登攀し、A~I滝(9個)とし、C滝まで溯行(鷗翔山岳会5人)
1976. 5	残雪期の剣沢完全溯行(大阪府立大山岳部、和田城志、片岡泰彦)
1977. 8	剣沢大滝を登攀し、緑の台地から急な岩稜を登り、戻る(大阪わらじの会、池上昌司単独)
1978. 3	冬季の剣沢大滝を登攀する(鷗翔山岳会3人)
1982. 10	無雪期の剣沢完全溯行、剣沢大滝をF1~F12(12個)とし、そのすべてを直登し測量、ビデオ撮影もする(高島石盛単独)

ブを一直線に落水する豪快な滝である。入口にして最大の滝であり、まるで仁王像のようである。兩岸がどこまでも切り立つ岩壁と、岩峰が滝を一層個性的なものにしている。

滝の一八層手前、釜のヘリを最後に徒渉するが、水しぶきと風が凄く、水流は波立ち、まるで台風のようなものである。急げば四〇秒でそんな状態から抜け出せるが、雨衣を着なければズブ濡れになってしまう。左岸のルンゼを二五層ほど登った所からアンザイレンし、七時三十分、登攀を開始する。

一ピッチ目(三五層)N、A0、一カ所アプミに乗ったが、特に難しい。ピンも必要残置されている。二ピッチ目(四〇層)、三ピッチ目(四〇層)、四ピッチ目(三五層)ともにIII。岩もあるが、急な木登りが中心で疲れる。古いロープや針金が所どころに残置されており、ルートファイ

ンディングは容易であった。四ピッチ登った所から五層ほどヤブこぎをし、七層の懸垂下降。そこからさらに一〇層ヤブこぎした所に、二人用テントが張れるくらいいい平地があった。

過去に入ったパーティーが整地したのである。そこから奥の方をのぞき込むと垂壁のむこうに万年草が生い茂る緑の台地が、そしてその左上にF6(三〇・〇層)の上半分が見える。垂壁の下には奈落の底の深いゴルジュが展開している。ついに黒部の秘境、剣沢ゴルジュを垣間見ることができた。僕はこれほどのゴルジュをかつて見たことがない。それは想像をはるかに超える絶景であった。

緑の台地までの登攀は難しそうであり、高島石盛氏の直登したF6は、それ以上に困難に思える。急な岩の岩稜を登って高巻くにしても、それは一つの登攀ルートに匹

り、高さ一八層くらいの立木が右下に二本あるだけで、あとはすべて万年草である。緑の台地で小休止した後、タキ火テラスに戻る。婦人もトラバースピッチなので時間をくい、懸垂した所は空中ユマリングで疲れた。タキ火テラスでピバークする。

〔タイム〕剣沢平(6:50) タキ火テラス(9:05/10:00) 緑の台地(13:00/13:30) タキ火テラス(15:45) ピバーク

五日(晴)

朝、空を仰ぐと高層雲が出ている。天候悪化が予想されるので、目的を終了してきょう中にロジックへ帰ろうと思う。

緑の台地までは固定ロープがあるにもかかわらず二時間半も要した。自分で打ったハーケン、ボルトはすべて回収した。緑の台地の支点を確保した後、チロリアンブリッジ(三七層)を設置する。ここをチロリアンにしたのは、時間の短縮と後始末を考へたことである。僕は剣沢大滝にロープなどを一切残したくなかったので、一冬

越えればなくなるであろうチロリアンは回収しなくても済むので都合良かった。

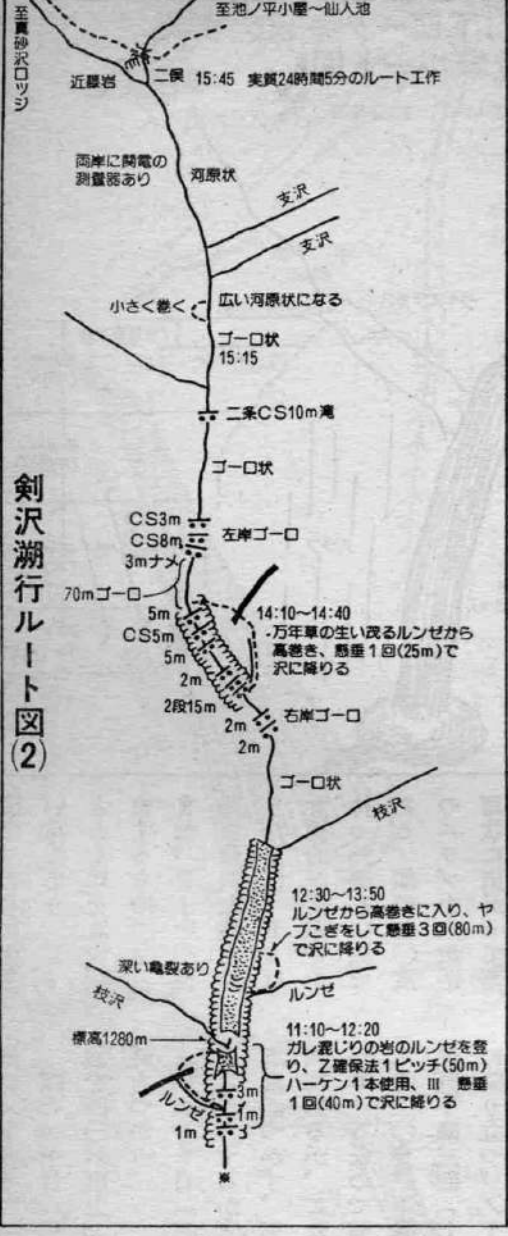
昨日は二時間半も要した緑の台地からタキ火テラスの間をチロリアン設置によって、一時間足らずの距離にすることができた。

剣沢ゴルジュのど真ん中に張ったチロリアン

〔ルートワーク〕(3)

一九八七年十月三日～五日
 十月三日(晴)

十月一日、二日と歯の治療のため休養し、三日、三回目のルートワークに出発する。今回は緑の台地までのルートワーク(岩壁にチロリアン用のロープを設置)を目的とする。ロジックを一〇時三十分に出発し、四



を飾るように、黒部川の樹木が紅葉で真っ赤に染まった。

七時一五分、ロジックろよんを出発する。今回は岳友の白井秀明氏(RCC神奈川)が、タキ火テラスまで僕を見送りに来てくれる。黒四ダムで彼と待ち合わせ、一路剣沢へ。水平歩道は連休のため、人が列になっていて時間をくった。

十字峡で昼食をとり、一二時三十分、剣沢の溯行を開始する。剣沢平を経て、三時間でタキ火テラスに着いた。ここにはテント、シュラフなどがデポしてあるので快適なピバークができる。白井氏が差し入れを持って来てくれた焼き肉を食べ、ワ

ンはずがにスリルがある。それをつたってタキ火テラスまで戻り、下山した。

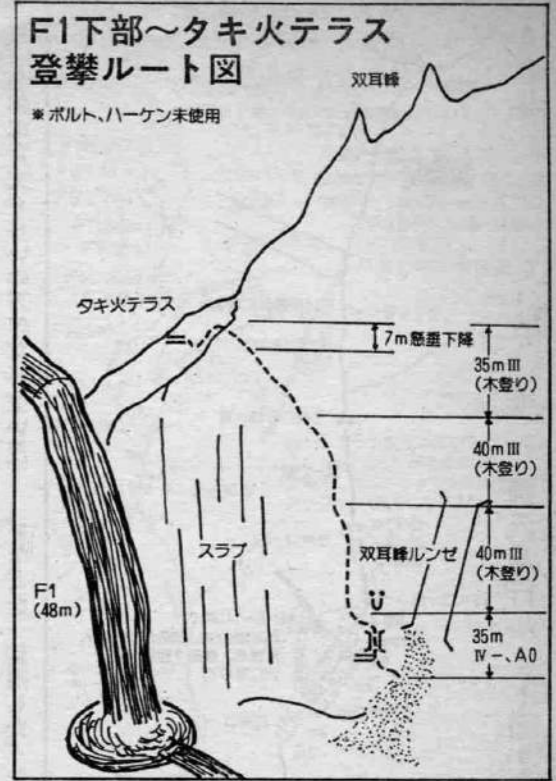
〔タイム〕タキ火テラス(6:25) 緑の台地(9:00/9:30) タキ火テラス(10:25/11:25) 剣沢平(12:15/12:55) ロジックろよん(17:40)

十一日(晴のち曇)

タキ火テラスを六時二十分に出発する。白井氏に別れを告げ、緑の台地へ向かう。タキ火テラスの下には、F2(一八・〇層)、F3(八・〇層)がある。F2は、F1の連瀑といった感じであり、取付からタキ火テラスまでの登攀(三ピッチ目)中に俯瞰できる。F3はタキ火テラスの真下にあつた手でない滝である。

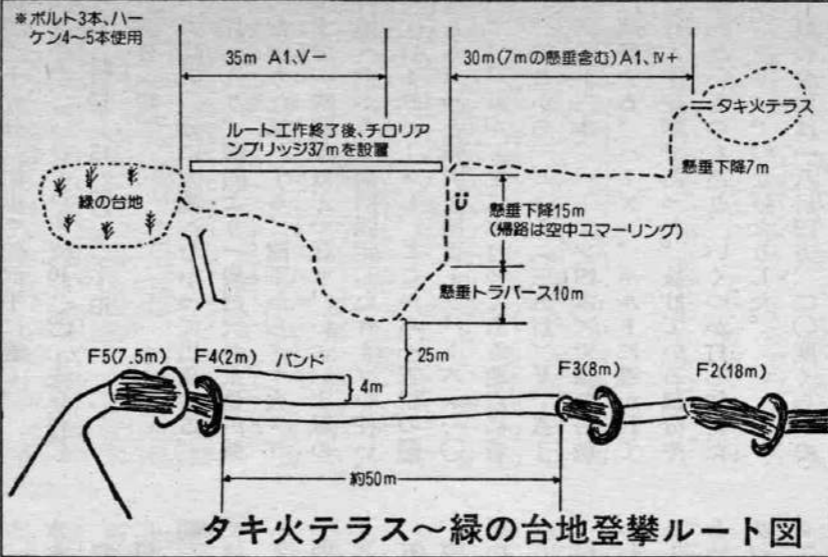
緑の台地の下にも二つ滝がある。F4(二・〇層)、F5(七・五層)ではほとんど連続している。F4は落差二層のかわいい滝だ。F5は落差と幅が八層の堰堤のような滝である。

固定ロープを利用して一時間弱で緑の台地に到着した。これより先は自分にとって未知の領域である。緑の台地の正面にはF6(三〇・〇層)がある。この滝は剣沢大



滝で二番目に大きい滝であり、F1とともにそれを代表するものである。また、F1を男性的な豪快な滝というならば、F6は女性的な優雅さを持った美しい滝である。傾斜七〇度のスラブを水流が扇状に広がって落ちる風景は目を見

はるものがある。



F6のすぐ上にはほとんど連なってF7(二・五層)がある。この滝は傾斜六〇度ほどのナメ滝である。このF6とF7を高巻くために緑の台地から派生する傾斜八〇度ほどの岩稜に取りつく(この高巻きに十一時間を要した)。一ピッチ目(三五層)Ⅲ(ハーケン三〜四本使用)は岩稜を忠実に三〇層登る。二ピッチ目(四〇層)Ⅳ、A0(ハーケン二〜三本、ボルト一本使用)。岩稜は手が出なかったため、右のルンゼに一〇層トラバースして、二〇層はドルンゼ状に登る。ルンゼが垂直になり、岩稜に戻った所でピッチを切る。

置ボルトあり)。四ピッチ目(四〇層)Ⅳ、A1。急な岩稜を四〇層直上。立木がある。岩は脆く神経をつかう。五ピッチ目(三〇層)Ⅳ、A0。懸垂をどこからするか考えながら登る。どうにも判断がつかず、三〇層ピッチを延ばす。残置はあるが、これ以上登ると下降できなくなりそうなので強引に下ることにした。一六時三〇分、下降開始。トラバースぎみの懸垂下降三回(七五層)でF7上の小尾根に降り立つ。ノーザイルで一五層ほど下り、再び懸垂下降一回(三〇層)でF7滝上に降りた。

脱水症状になりかかっていたので、すぐに水をがぶ飲みする。急な岩稜の登攀は非常に脆く、落石でザイルを一本だめにしてしまった。また、それが原因で懸垂下降がスムーズにいかず、時間をくった。ヘッドランプは出したものの、なんとかその日のうちに沢に降り立ち、ビバークできたのはうれしい。F7滝上の大石には二層×三層の平らなスペースがあり、横になってビバークできた。ビバークした所がちょうど風の通り道だったので、寒くてほとんど眠れない夜であった。

しい谷であった。

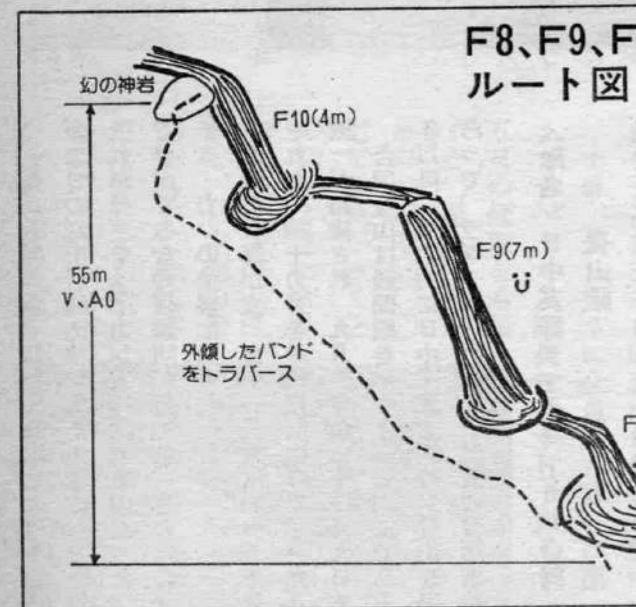
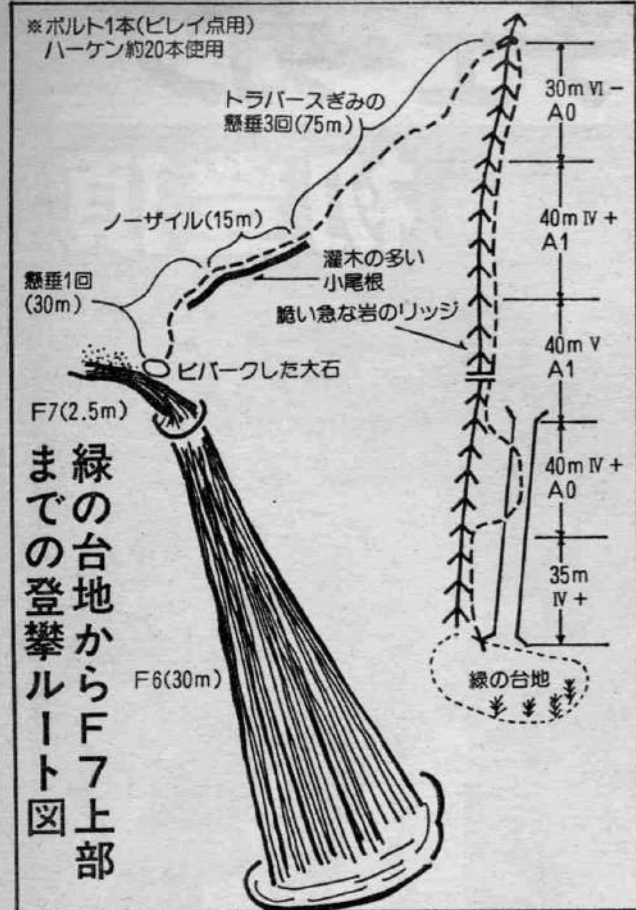
ある人は、自己の沢登りの最終到達点として剣沢に挑んだ。またある人は、忘れることのできない夢として剣沢溯行を抱き続けている。いわゆるガイドブックに出ていないような岩登りや沢登りをどこでも問題なくトレースできるなら、剣沢は登れない沢ではないと思う。しかし、気軽に取り組むべきものではなく、あくまでこだわりを持ち、心の準備を整えて取り組むべき課題である。

僕としては、過去の記録にとられない自分なりの溯行ラインをとろうと考えて溯行ラインをとることができなかった。F6の直登を技術的な無理を感じて敬遠したからだ。しかし自分なりの自然なラインを取れたので僕は満足である。

この日は、真砂沢ロッジまで行き、そこで泊まることにした。
 [タイム] 剣沢溯行(6:20~15:45) 真砂沢ロッジ(16:40) 小屋泊
 十三日(晴)
 当初、ここから源治郎尾根をつめて剣岳へ行くつもりであったが、昨日、剣沢大滝F10の釜にザイルが引っかかり、それを取りに釜に飛び込んだ時、左足を打撲し、朝になつたら、それが少々痛んできたので下山することにした。五時間ほどの徒歩でロッジくろよんに帰る。
 [タイム] 真砂沢ロッジ(7:45) ロッジくろよん(12:40)
 [ルート工作後始末]
 一九八七年十月十六日〜十八日
 十月十六日(曇時々雨)
 ルート工作の後始末に出かける

こととした。今回は緑の台地まで張った固定ロープを、できる限り回収することを目的にした。また、随所にデポしてある装備も回収しなければならぬ。
 大型の台風19号が本土を直撃するであろうといわれているさなかに出発した。剣沢平まで四時間十五分歩き、そこで泊まる。
 [タイム] ロッジくろよん(8:00) 十字峡(11:15) 剣沢平(12:40) テント泊
 十七日(雨)
 夜は幸い大雨にならず、剣沢の水量もたいて増水していない。ラジオの放送は、四国地方は大雨と洪水に見舞われると報じている。片道三回の徒渉があるので、増水

したら帰ってこれなくなってしまう。悩んだあげく、ロープ回収に行くことにした。取付まで走り、タキ火テラスまで駆け登る。緑の台地までの中間点まで往復。古い残置ロープをきれいにするため、鉄を持って来たが、急いでいるのでそれを使うひまがなかった。タキ火テラスから取付までのロープ回収も、途中でロープが引っかかってしまい、二〜三ピッチ目にかけてラインを一本残置した。一〇時三〇分、なんとか増水する前に剣沢平に戻った。
 剣沢平の荷物を撤収して、四〇層の大荷物で十字峡へ向かう。徒渉とロープで登る八〇層は地獄であったが、なんとか十字峡まで行くことができた。きょうはここでテント泊とする。
 その後、どしゃ降りの雨となり、夜半まで降り続いた。剣沢が増水したのは当然のことである。
 [タイム] 剣沢平(6:30) 固定ロープの回収作業―剣沢平(11:00) 十字峡(13:00) テント泊
 十八日(晴)
 朝、空を見上げると雲一つない青空である。七時、荷支度をして出発する。十字峡でさらに荷物が加わったので、ザックは五五キほどである。通常の四倍も時間がかかり、ちょっと苦しすぎるので、一〇キほどの荷物を白竜峽にデポした。その後は通常の二倍くらいの時間で歩くことができ、なんとかロッジに帰った。
 [タイム] 十字峡(7:00) ロッジくろよん(14:00)



と連続する。F8から雪渓までの間は、昨日、岩稜登攀中に望見して確認済みである。F8からF10の間を一ピッチ(五五層)Ⅳ、A0(ハーケン約一〇本、ボルト三本使用)でルート工作する。F8、F9、F10をほとんど直登するように、右岸の外傾したバンドをトラバースして行くが、手強く、途中でランニンググレイとして三回ボルトを根元まで打ち込んだ。このピッチにぐらぐらの残置ハーケンが二つあったが、これは無雪期にここを通った唯一の溯行者、高島氏が残したものである。一時、F10滝上に達し、剣沢大滝を完登した。